

人の心を動かす支援がしたい

JICA産業開発部の江原由樹さんは、開発途上国の経済・産業発展に必要な不可欠な、エネルギー、鉱物資源の開発を担当している。JICAの味が伝わるような支援を目指し、日々奮闘している。



JICA産業開発部
エネルギー・資源課
江原 由樹
EHARA Yoshiaki

大学卒業後、2000年JICAに就職。鉱工業開発調査部（現産業開発部）、総務省総合通信基盤局、ケニア事務所を経て、2007年7月より現職。

大

学時代は地質学を専攻し、何千年、何万年も前のことを研究していました。ですから、実を言うと「もう人の住んでいない世界はイヤだな」と思ってこの業界に入ったんです。結局、就職後いきなり、今までと同じ、資源を取り扱う部署に配属されてしまったんですが（笑）。でも、新たに「国際協力」という立場でこの分野に携わるようになり、すべては人間の経済活動の一環で、最終的には、人がかかわってくることなんだと実感しています。

私たちの主な仕事は、開発途上国の支援が円滑に進むよう、プロジェクトを「コーディネート」することです。それだけ聞くと「なんだそれだけか」と思うかもしれませんが、そういった、陰の調整役こそ、とても重要であると自負しています。

今担当しているマダガスカル調査（16ページに関連記事）は、日本で実施したJICAの研修に参加した研修員のアクションプランがきっかけで、同国政府から要請がありました。近年、世界的にもマダガスカルの鉱物資源は注

目度が高い。日本としても何かできないかと考えていたところだったので、まずは現地に行つて現状を確認し、どんな支援が必要なのか、日本に何ができるのかをマダガスカル政府と議論しました。その中で、豊富だと言われながらも、鉱物資源の位置を十分に把握できていないという問題が出てきたので、日本の強みである衛星を使った情報解析を活用して地質情報を整備する調査を始めることになりました。

関係者と協議を重ねて調査内容を固め、担当するコンサルタントも決まって、これからいよいよスタートという時に、実は、現地でクーデターが発生してしまいました。結果、情勢が安定するまで地方での野外調査は延期せざるを得ず、一年目は、首都を拠点にリモートセンシングの技術移行を行うよう調査内容を変更しました。途上国でこういったトラブルは付きもの。臨機応変な調整能力が求められます。さらに、草の根から国家レベルまで、さまざまな人を相手に仕事をするわけですから、頭でっかちにならず、その間を柔軟に行き来できるような姿勢も重要です。

日本の支援はもちろん、JICAだけでなく、コンサルタント、NGO、大学など、さ

まざまな組織がかわつていて、今後はさらなる連携、オールジャパンでの支援が求められています。ですから、サッカーでいうと、一人で一生懸命練習してドリブルだけがうまくなくても意味がない。国際協力も同じことです。パス練習をしつかりやっ、皆で協力している支援を作り出していかなければなりません。その中でJICAは、チームジャパンの裏の司令塔として活躍していければと思っています。

私が目標としているのは、「日本の支援つうまくいってるよね」と、周りの人に思ってもらえるような仕事をすることなんです。そしてその時にこう言いたい。「人の心を変えることができたらだよ」と。人の心とか行動つて生半可なことじゃ変わらない。でもそこそが、途上国にとって大きな一歩になると思うんです。これからは現地の人たちと真正面から向き合い、一緒に問題を解決していきます。



マダガスカル鉱山省の関係者たちと協議をする江原さん



安全服とヘルメットを身に付け、資源の可能性を求めて現場に出陣！（ザンビア）